

赤く染まる加古川市沿岸部の夜空＝5月26日午後11時29分、同市(撮影・井上太郎)



加古川の夜空なぜ赤い

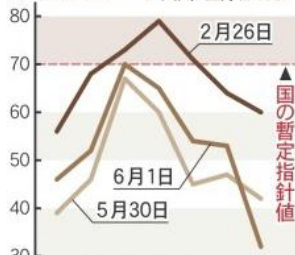
鉄塔、製鉄所の明かり光源か

加古川市付近の夜空が、赤く染まる日がある。火事だと思った住民が119番したこともあったらしい。かつて工場からの粉じん飛散が問題になり、近年は微小粒子状物質「PM2.5」が高い濃度で観測されるなど、「お騒がせ」な空でもある。「何が影響しているの?」。そんな住民の声を聞き、調べてみた。

(安藤文暁、井上太郎)

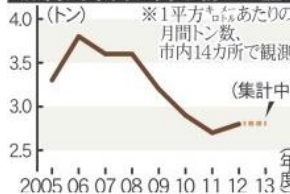
夕焼けは太陽が地平線に傾いた時、波長の短い青系統の光が大気中で散乱して、主に赤系統の光だけが地上に達することだけが見られる現象だ。日没後にそんな光が地上にあるのか。あるなら、何に反射して空に広がっているのか。

PM2.5注意喚起 各地の測定値 (マイクログラム) ※大気1立方メートルあたり



高いPM2.5濃度 浮遊するちりにも反射?

加古川市内の降下粉じん量 (トン) ※1平方メートルあたりの月間トン数、市内14カ所で観測 (集計中)



2006年にばい煙の一方、「光を反射しているのは、大気中のちりではないか」という声もある。環境省は3月以降、中国からの飛来や車の排ガス、工場のばい煙など、さまざまな観点から調べている。そんな中、環境研究センターは「標高が低く、高い山がない」という加古川流域の地形が大気中の浮遊物質に関係している可能性にも注目する。赤い空の謎、まだまだ奥が深そうだ。

光が抜けやすいのでは」と担当者。高層建築の少ない加古川は街が暗く、確かに障害物の赤が夜空に際立つ。夜も稼働する沿岸部の神戸製鋼所加古川製鉄所は、構内の道路に多くあるナトリウム灯を原因に挙げた。「トンネル内に使われるオレンジ色の照明で、青より波長が遠くに届くため視認性が高い。それが雲に反射して赤く見える」と分析する。

排出データ改ざん、粉じん飛散問題が表面化した同製鉄所は、防じんネットを設けるなど対策を推進。加古川市によると、粉じんの飛散量は減少傾向にある。また、粉じんは粒子が重いいため、上空にとどまることは考えにくいという。PM2.5の影響は不明だ。先月末と今月初め、兵庫県が播磨東部に注意喚起を出したが、なぜこの地域だけ濃度が高いのかについても、専門家からは「まだ分からない」と口をそろえる。

